

木の芽峠の御茶屋前川家住宅*

吉田 純一^{*1}, 多米 淑人^{*1}

Maegawa Traditional House in Kinome Mountain pass

Junichi YOSHIDA ^{*1} and Yoshihito TAME ^{*1}

^{*1} Department of Architecture and Environmental Engineering

This article is a report of the findings in a house of the Maegawas located on the Kinome mountain pass of Tsuruga-city. Hokurikudo way through along the Kinome mountain pass for a long time and this place was the doorway of the Echizen district. The household of Maegawas acted as the post called Otyayaban of the Fukui feudal clan and kept watching the passers of the Hokurikudo way. Maegawas house have the traditional room called Gyokuza where the Fukui feudal lord take a break. We clarified the following things through the investigation this house, 1) Maegawas house was built in the middle of the Edo era, 2) Maegawas house is the valuable historic house which exist in the descript of Fukui prefecture.

Key Words : Maegawas house, Otyayaban, Traditional house, Kinome mountain pass, Edo era

1. はじめに

本稿は、南条郡南越前町今庄の木の芽峠にある前川永運家住宅の建築調査報告書である。木の芽峠は越前と若狭の境界に位置し、標高は 628 メートルに及ぶ。平安時代に拓かれた近畿と北陸を結ぶ官道が通る峠で、古くは親鸞や道元禅師、松尾芭蕉などの宗教人や文化人、さらに源義経や朝倉一族、織田信長や豊臣秀吉ら部将たちもこの峠を通った⁽¹⁾。前川家住宅のすぐ前を旧官道が通り、それを挟んで道元禅師の石碑が整備されている。前川家には秀吉軍がこの峠を越えた際に贈られたという軍用釜も伝来、「太閤の茶釜」として今も保存されている。

前川家歴代当主は、江戸時代を通して福井藩の茶屋番を任じられ、峠越えの旅人の監視を務めていた。当家住宅は旅人の休憩所として役割を果たし、明治 11 年 10 月の明治天皇北陸御巡幸の際には御小休所にもなっている。

つまり、木の芽峠およびそこにたつ前川家住宅は、中・近世から近代にいたるまで越前の玄関口として歴史上、重要な場所であったのである。明治 32 年に北陸線が開通して以降、その役割は急速に薄れていったが、前川家住宅は今も昔の面影を留めて木の芽峠にたたずみ、時折訪れる訪問者をやさしく迎かい入れている。

2. 調査について

平成 27 年 5 月末、在京時代から付き合いのあった金沢職人大学校の戸石久徳先生から前川家住宅調査の依頼を受けた。戸石先生は、前川永運氏と親交がある（株）キャスの経営者曾田孝志氏から相談を受け、地元福井にいる私が思い浮かび、連絡したとのことである。

平成 27 年 6 月 2 日、戸石先生・曾田氏とともに前川家を訪れた。以前に一度訪ねたことはあったが、かなり昔のことで記憶はほとんど薄れていた。改めて前川家住宅を見、永運氏の話の伺う中で、調査の必要性を実感した。その日は後日の詳細調査を約束して日が暮れる前においとしました。

* 原稿受付 2017 年 2 月 22 日

^{*1} 工学部 建築土木工学科

E-mail: jun-y@fukui-ut.ac.jp

再度訪れての調査は平成 27 年 9 月 23 日に行った。住宅の平面や構造、痕跡などを詳しく調査するとともに周辺を含めた配置や立地状況の調査、写真撮影などを行った。調査に関わったのは、吉田の他、多米淑人福井工業大学准教授と吉田、多米両研究室の学生である松田翔也・島田健司・大谷真也・高本真衣・板東遼也（以上、吉田研）、田中翔也・小山淳則・堀川唯人・弘中翔太・柳澤隼人（以上、多米研）の 10 人である。依頼主で、一級建築士でもある曾田氏も調査に加わった。

本稿を作成するに当たり、本文執筆は吉田が担当、断面図は多米准教授の指導の下に調査に関わった上記学生たちが作成し、平面図や柱寸法図は曾田氏の作成になる。写真はおもに多米が撮影したものである。



Fig. 1 前川家住宅の所在地図
『今庄町誌』より)

3. 御茶屋番前川家について

前川家所蔵の『前川家ノ記録』⁽²⁾（以下、『記録』と略称する）によると、当家は桓武天皇の皇子葛原親王の子で、平姓を賜った高望王姓を祖とし、その子上総介平良兼の代に武官となり、代々上総に住んでいた。源平兵乱後、津田太郎兵衛尉親行の代に前川姓を名乗り、親行から数えて 21 代目の前川帯刀が濃州稲葉山から越前北ノ庄に移った。しかし、朝倉敏景との戦いに敗れ、若狭国三潟郡大村に閑居、その時から大村は前川村と改名されたという。

平成の町村合併により旧三方郡は三方上中郡となったが、郡内の若狭町には今も北前川町、南前川町の地名が存している。

また、『記録』によると、前川家が木の芽峠に居を構えたのは文正元年（1465）とのこと、今から 550 年余も前のことである。同書には「文正元年越前ノ国南條郡木ノ目山ニ柴ノ庵ヲ結ヒ閑居ス」とある。そして天正 11 年（1581）、北越征討の帰途に立ち寄った豊臣秀吉から陣釜を下賜された。当家に伝存する「太閤の軍用釜」がこれとのことである。その後、慶長 5 年（1600）の結城秀康入封の折には再三召抱えを命じられたが、固辞したという。しかし、『記録』には「當山則チ（木ノ目山）何程成リ共勝手ニ切開キ、作り等可致旨ヲ以テ限りナク下賜フ、加之野扶持拾四石三人扶持并ニ不要害ノ土地柄故犬ヲ飼置キ候様、犬飼一人宛下賜フ、尚家作等不殘御普請相成」とあるように、野扶持 14 石 3 人扶持を与えられ、新たな家の作事、普請も行われたことがわかる。犬は不要害の土地柄故の番犬であり、犬飼 1 人分の扶持も与えられている。ちなみに、前川家には現在も 2 匹の犬が飼われている。また「家作ハ総テ越前家ノ御普請ニテ年々修理相成ル又建具畳等汚損スレバ城代へ申告シ夫々順序ヲ経テ作事奉行ヨリ修繕相成事」とあるように、その後の住宅の修繕や改修も藩によってなされていたことがわかる。

なお、扶持については先掲記述に続いて「吉品卿ノ御代貞享三年一統半知の命有之其節右扶持不殘返上候処尚再応御懇命ヲ以テ右半禄即チ七石二人扶持宛下賜フ、以后代々同山ニ居住ス」とある。福井藩 5 代藩主昌親の代までの様子は明らかでないが、6 代藩主綱昌の代の家臣団やその禄高を記す『越前守綱昌公御代延宝七末年給帳』⁽³⁾に「木目茶屋番 一人」とあり、これは前川家を指すとみられる。そして 7 代藩主吉品の『兵部大輔吉品公御給帳』⁽⁴⁾には「七石 二人 木目茶や前川彦齋」とあり、前川彦齋が『記録』にみられる記述と同じ 7 石 2 人扶持を受けていたことがわかる。さらに 8 代藩主宗矩代の寛延年中の給帳には「八石 二人 木目茶屋 前川彦助」とあり、1 石増えているが、やはり前川姓の彦助が「木目茶屋番」として禄を受けていたことも確認できる。これ以降、いつまで茶屋番役を務めていたのかは定かでないが、幕末の水戸天狗党の通行の折の経緯なども『記録』に詳しく記され、前述したように明治 11 年 10 月の明治天皇北陸御巡幸の際には御小休所になっていることなどから明治に入っても前川家が重要な役割を担っていたことは疑いない。

4. 前川家住宅の建築形式

4.1 立地

前川家住宅は、峠の頂上に建つが、南東から北西にかけてやや下がる傾斜地のため敷地は北西隅に自然石を5, 6段積んで整地されている。敷地の大きさは、旧官道に面する正面（南北）が約33メートル、官道から東側背後の山裾までの奥行き（東西）が約21メートル、広さは約693平方メートル（約210坪）である。当住宅は敷地の北寄りに建ち、南半は空き地になっている。この空き地には、後掲の明治天皇北陸御巡幸の折の図からも明らかのように、「山廻番」を務めていた吉羽家住宅があった。

4.2 住宅の概要

前川家住宅は入母屋造、茅葺で南北に棟を通す平入りの主屋部とその南側につながる玉座部、さらに北端から後方に続く居住部からなる。玉座部も茅葺きで、主屋と同じように南北に棟を通す。南端を入母屋造としていて、一見主屋部と一体の建物にみえるが、棟筋がズレ、かつ棟高も一段低い。さらに平面図からも明らかなように、主屋部との連結部には別に柱が立っていて、構造的にも別の建物であることがわかる。一方、主屋部の北端から東にL型につながる居住部は茅葺、寄棟造の建物で、この部分も主屋境には別に柱が建っている。

4.3 規模と平面構成

主屋部は、桁行11.4m（7間）、梁行7.987m（約4間）の規模をもつ平入りの建物である。北半に大きないろりをもつ板敷のオエがあり、前方は半間幅の土間になる。その前方につく下屋に勝手口、便所が設けられている。オエの南隣は、前半が土間（ニワ）の入口で、後半が7.5畳のゼシキ（「供奉」と称す）がとられ、奥行き約2尺5寸の浅床がついている。

玉座部は、桁行4.362m（2.5間）、桁行7.987m（約4間）で、床と床脇を備え、「玉座」と称する8畳の座敷が中心である。その前方には座敷専用の入り口になる土間がつく。座敷の後方には縁、その南端に上便所がついている。

主屋部の北端から東方へつながる居住部は、桁行9.355m（5間）、梁行4.910m（2.5間）の建物である。ここは現当主の日常生活空間で、8畳間と6畳間の2室およびその奥の台所・浴室・便所などからなる。

後掲の明治天皇御巡幸の際の前川肇家の平面図⁽⁵⁾をみると、主屋部およびその南につながる玉座（八畳）の構成は現状と同じであるが、「供奉台所」とあるオエから東には「八畳」が一部屋張り出すだけで、現状のような2間続きとは異なっている。

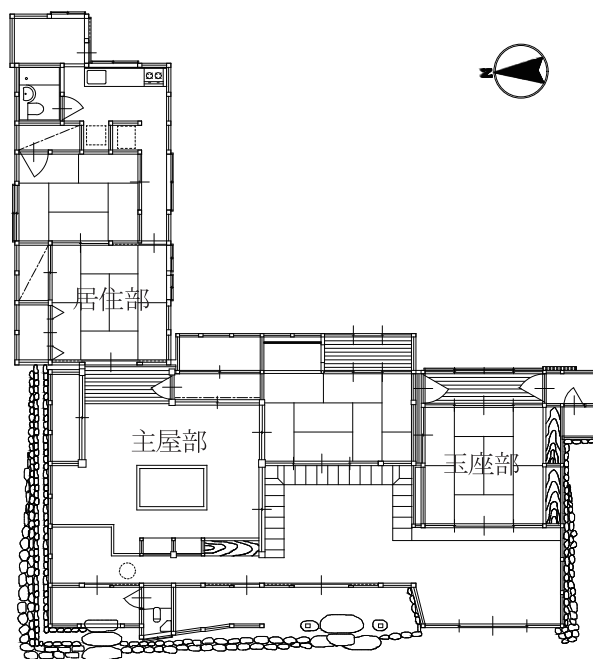


Fig. 2 前川家1階平面図

4.4 構造、室内構成・意匠

近世民家の構造は上屋・下屋からなり、前後の上屋柱天に上屋梁を渡し、茅葺の場合はその上に合掌（叉首）を組んで屋根の骨格を構成するのが一般的で、合掌尻（下端部）は上屋梁に載る場合と上屋柱筋に通される前後の桁で支持される場合がある。

前川家住宅の構造の基本はやはり上屋・下屋構造をとっている。梁間方向の断面図からもわかるように、前後の上屋柱通りに桁を通して上屋梁を受け、合掌はその梁筋で生まれ、合掌尻は桁で支持されている。ただし、平面図をみれば明らかなように上屋柱はオエ回りの前後と北側、7.5 畳のザシキ（供奉）の東側にみられるが、ザシキ前方の土間部分では省略されていて、垂木を前方の下屋から庇部分まで下し、茅屋根を一体で葺きおろし、下屋が上屋に取り込まれている。

上屋柱、下屋柱はいずれも自然石を据えた礎石の上にたつが、特にオエ回りの柱は太く、7 寸～8 寸程度、材種はケヤキとみられるが、表面は黒光りするほど煤けている。このオエの梁行、桁行の中央に十字に低く梁を架け渡し、上屋梁の中ほどはこれらの梁上に 1 間間隔にたつ束によって支えられている。これらの梁も煤けて黒光りし、2 段構成の梁組とともに独特なオエ空間を演出している。

ザシキ（供奉）は畳敷きで、奥行きは浅いものの床を備え、天井は根太天井である。オエに比べて整った室内構成である。床回りの柱は表面がきれいで、後の改修によって入れられたものとみられる。これに対して当初とみられる柱は黒く煤けており、曲材や面が不揃いであったり、虫食いや風食が甚だしい。

南に続く玉座部は 8 畳間とその前方の土間からなる。主室の 8 畳間は南面に床と床脇を備え、柱は 4 寸前後の杉面皮柱で、東側に縁と小便所がつく。前方の土間境は内法に指物を入れて 2 間持ち放しの柱間を固めている。天井は棹縁天井で、主室のオエやザシキよりさらに整った室内構成、意匠がみられる。小屋組はやはり合掌を組み、茅屋根を構成しているが、前方土間の上部は茅葺ではなく、緩勾配の金属板葺屋根になっている。勾配からみて以前はおそらく板葺あるいは杉皮などの樹皮葺であったと思われる。

4.5 建築時期の推定

現在、住宅の玄関表には「永正元年の建築」との貼り紙がされている。永正元年（1466）は前述したように前川家が当地に居を構えた年である。前川家住宅の建築年代や建築時期を示す確証はなく、建築形式や様式から推定せざるを得ないが、現住宅がこの時、すなわち永正元年まで遡ることは無理であろう。

前述したように、現在の前川家住宅は、主屋部に玉座部と居住部がそれぞれ別棟でつながっているが、これらはそれぞれ建築時期を異にし、最も古い部分はオエと土間、その奥にとられているザシキ（供奉の間）からなる主屋部である。オエやザシキの後方部には後世の改修が認められるが、真っ黒に煤がこびりついた柱や梁材、さらにオエの上方に十字に組まれた梁の様子などからみると、主屋部は江戸時代のはじめころまで遡ることも考えられる。

主屋部の南につながる玉座部は主屋境に新たに柱を添えてつながっており、柱の表情などからみると、主屋部より遅れ、江戸時代中期から後期の建築と思われる。また、オエの後方に張り出す居住部は主屋部や玉座部と比べると、はるかに新しく、前述したように明治天皇の北陸御巡幸の折の図とも違っていることから現状のように 2 室構成になったのは明治 11 年以降と判断できる。

5. 『福井県今庄町誌』所収の前川肇家の平面について

『福井県今庄町誌』の「四、木ノ芽峠茶屋前川家」の項に、「前川 吉羽家平面図」が掲載されている（Fig. 3）。注記に「明治天皇巡幸時の前川 吉羽家及び附近見取図。明治十一年十月九日午前十一時四十分着御」とあるように、この図は明治 11 年の明治天皇北陸御巡幸の折にお休み処となった際のものである。図の右手が敦賀方面、左手が今庄方面で、中央の旧北陸道に面して右側に吉羽八左衛門家、左側に前川肇家の略平面図が記され、道を挟んで前川家の前方には 6.5 間×3 間程度の「腰掛」と便所とみられる施設が設置されている。

前川家と吉羽家の図はともに部屋割や諸部屋の広さを示す簡単な平面図であるが、前川家の図を現況と見比べてみると、部屋の構成や大きさなどはほぼ合致している。「腰掛」の右側に描かれている「石碑」は現在もある「上

酬慈恩塔」とみられ、その大きさや位置も現状に近い。したがって、この図は見取図ではあるが、記載内容はかなりの信頼性をもっていると考えられる。

図にみられる吉羽八左衛門家と巡幸のために仮設されたとみられる「腰掛」は現存していない。吉羽家は藩政期から山廻役を仰せついていた家で⁽⁶⁾、住宅は正面3.5間、奥行き7.5間前後の大きさで、土間や台所、六畳の座敷などからなる。右側に張り出す一画は客座敷と思われ、ほぼ、前川家と同じような規模を有し、妻入り、平入りの違いはあるが、部屋の構成も似通っていたことがわかる。「腰掛」は御巡幸に伴って仮設されたものである。

改めて前川家の見取図と現況の前川家平面図を見比べてみると、部屋名は異なるが、供奉台所(オイ)、内膳(ザシキ、供奉座敷)とこれらの前方につく土間、入り口などからなる主屋部およびその南に続く玉座部と前面の土間の構成ならびにこれら諸部屋の大きさなどはほとんど同じである。したがって主屋部と玉座部は明治天皇北陸御巡幸時点には現状と同じ状態で存在していたことがわかる。これに対して、台所から東側背後につながる2室構成の今の居住部の位置にはこの図では「八畳」の部屋が1部屋張り出しているに過ぎない。したがって、現状の居住部は北陸御巡幸の明治11年以降に改修、増築されていることも明らかである。

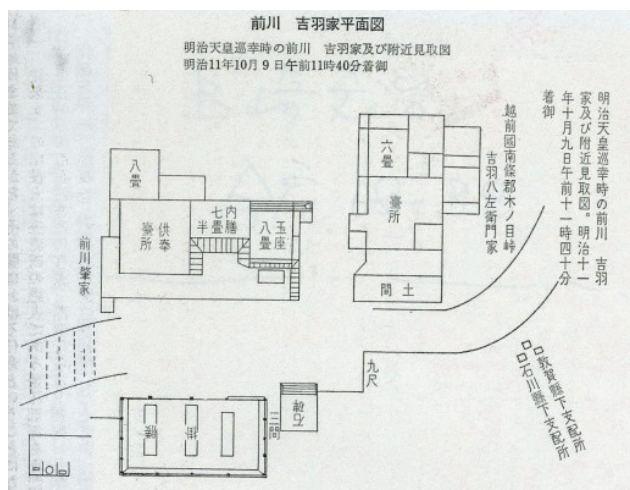


Fig. 3 明治天皇御巡幸時の前川家住宅
(『今庄町誌』より)

6. 周辺地域の民家との比較

昭和43年に実施された福井県内の近世民家調査をまとめた『福井県の民家—民家緊急調査報告書—』⁽⁷⁾ (以下、『福井県の民家』とする)によれば、福井県の民家は、間取りや構造形式から越前型4形式と若狭型3形式に大別できる。これらは地域的にもそれぞれまとまりがあり、越前型の4形式はほぼ嶺北地方に分布し、若狭型の3形式はほぼ嶺南地方に分布している。前川家住宅が所在する木の芽峠はこの嶺北地方と嶺南地方の分岐点であり、当家の建築形式がどちらの形式に近いのかは学術的にもきわめて興味深い。以下に既存の事例と比較し、前川家住宅の建築形式の特徴を探ってみたい。

6.1 越前I型民家との比較

前川家住宅が所在する南条郡(現南越前町)をはじめ武生市(現越前市)、今立郡(現越前市)、丹生郡(南越前町)などの南越地方の民家は越前I型に分類されている。これは、平入りで、間取りは表側に土間・台所・馬屋などの土間部分を取り、奥に部屋が並ぶ室構成をもつのが通例である。

『福井県の民家』には、現在、南条町の花はす公園内に移築されている旧谷口平右衛門家住宅(旧在武生市横市 Fig.4 左)や高木岩雄家住宅(武生市勾当原町, Fig.4 右)が越前I型の民家事例として紹介されている。両住宅はともにツノヤをもつ大型の民家で、部屋数も多い。平入りで、前方にドマやオイエ(オユエ)を、後方にザシキやナカノマなどの諸室を横一列に配している。この両家住宅と比べると、前川家住宅は、平入りは同じで

あるが、間取りの構成は大きく異なっていて、共通する要素はほとんどない。したがって前川家住宅は、越前Ⅰ型の民家の類型には属しないと判断できる。

6.2 板取宿の民家との比較

『福井県の民家』には越前Ⅰ型の例として旧今庄町板取の水口重郎家住宅も紹介されている。水口家が所在する板取は、木の芽峠を越前方面に降りた旧宿場村であり、前川家ときわめて近い地域にある。Fig.5はその平面図である。

この図によると、正面4間、奥行3.5間で左側前方に1.5間×1間のフロが張り出している。右半の前面がドマで入り口になり、その奥に仏壇を備え、エンガワをもつ6畳のザシキがある。一方、左側の前方に張り出すフロの奥は2間×2.5間、10畳大のダイドコで、その奥にネドコ（4.5畳大）が続いている。水口家住宅の建築年代は19世紀と推察されている。

この水口家と前川家住宅を比較してみると、水口家の規模は前川家の主屋部に近い。また入り口のドマとその奥にザシキが続き、これらの左手前方にダイドコロが接続することも前川家と類似している。しかし、水口家住宅のダイドコロの奥につくネドコは前川家住宅にはなく、背後に別棟で張り出している。既述したように現状の2室構成の居住部は後世に増築、改修されたものであるが、明治11年時点でも8畳大の1部屋がツノヤとして突き出ている。しかもFig.6に示す上板取や下板取の民家⁽⁸⁾は、いずれも妻入りで、間取りも奥に向かって2列構成となるのが一般的で、表にミセとドマ（ニワ）がとられ、ミセ列はクチノマやオクノマがニワの奥にはダイドコロやネマが続いている例が多い。したがって、前川家住宅は水口家住宅や板取宿の民家とも類似点は少なく、むしろ大きく相違しているとみることができる。



Fig. 5 水口家住宅
（『福井県の民家』より）

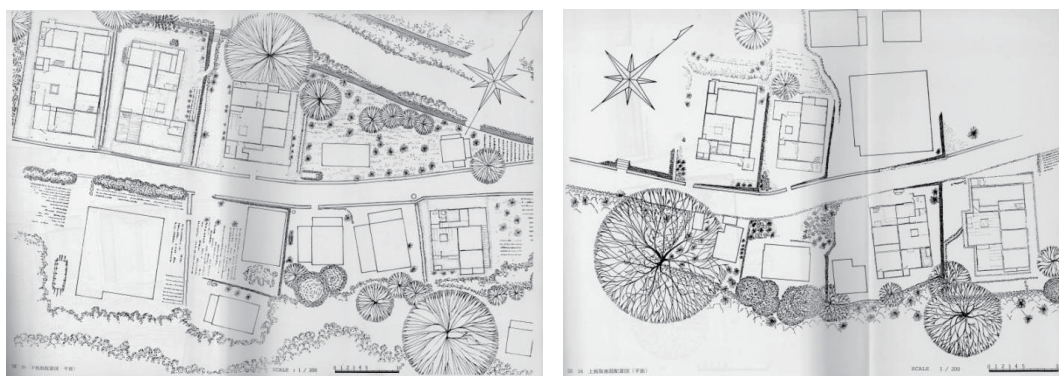


Fig. 6 板取の民家
（『福井県南条郡今庄町板取地区伝統的建造物群に関する調査研究報告書福井県南条郡の民家』より）

6.3 敦賀・美浜の民家（若狭Ⅰ型）との比較

一方、前掲の『福井県の民家』によると、敦賀市域から小浜市東部までの地域の民家は若狭Ⅰ型に類別されている。その形式の特徴は、平入り、茅葺（合掌組）で、平面構成は棟通りで前後に部屋割し、前半部に台所・土

間・馬屋，後半部に寝間・座敷を配し，構造的には家の中央の部屋境に柱をたて，これより梁，指物をくばる形式をもつとされている。そして同書には Fig 7 に示すような美浜町と三方町の調査民家の平面が紹介されている。これらの民家は後世の増改築や改修があり，同じ若狭Ⅰ型といっても現況の平面は多種多様である。ただし，いずれも平入りであり，同書が指摘するように表側にドマ（オオドとも呼ばれている）とダイドコロが左右に採られていること，ドマの奥にクチノマがあることなどは共通している。このような構成は前川家住宅にも認められる。かつ注目されるのは，ダイドコロの前方に大小の差こそあれドマが付随している例が多いことである。特に高木五一郎家住宅のそれは幅半間程の狭いドマで，前川家住宅とよく似ている。これら若狭Ⅰ型の例にみられるダイドコロの奥のネドコやナンドが前川家住宅では母屋の背後に別棟でついている点は異なるものの，前川家住宅の平面構成は若狭Ⅰ型の民家に類似している点が多い。

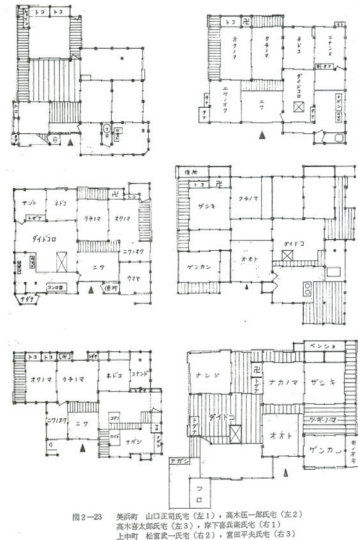


図2-23 美浜町 山口五郎氏宅（左1）、高木五一郎氏宅（左2）
高木五一郎氏宅（左3）、岸下喜兵衛氏宅（右1）
上中町 船重長一氏宅（右2）、富田平次氏宅（右3）

Fig. 7 若狭Ⅰ型の民家
（『福井県の民家』より）

7. おわりに

以上，前川永運家住宅は，古代から中世に遡る古い由緒をもつ家で，永正元年に現在地の木の芽峠に居を構えてからもすでに 550 年余を数える旧家である。当家が立地する木の芽峠は平安時代に拓かれた官道が通り，京・上方から北陸へ下る，あるいは北陸から京・上方へ上る際の越前の唯一の玄関口や出入り口として歴史上も重要な地点であった。当家は慶長期，福井藩から茶屋番を仰せつかり，以来，峠を越える人たちの見張り役をつとめ，住宅は休憩所としてもその機能を有していた。

江戸時代後期に書かれた越前の地理書ともいべき『越前国名跡考』（『新訂越前国名跡考』⁽⁹⁾）には「◎木目峠郡境 ○敦賀郡新保駅へ二拾四丁，下り二ツ屋駅へ三拾一丁一間，下り坂今庄駅へ二里五町四拾一間半。国絵図 ◎御茶屋 ○峠前川彦助宅中，八畳敷の間有。太閤より賜はりしと云釜あり。往古より此所に居住の者の由。秀康卿御入国以来御茶屋番として禄を給ふ。其東隣に吉羽八左衛門と云者あり。木の目山廻りにして結城より秀康卿御供にて来りしもののよし。是も禄を賜ふ。」とあり，以上触れてきた前川家の伝承や史実がほぼそのまま記載されている。

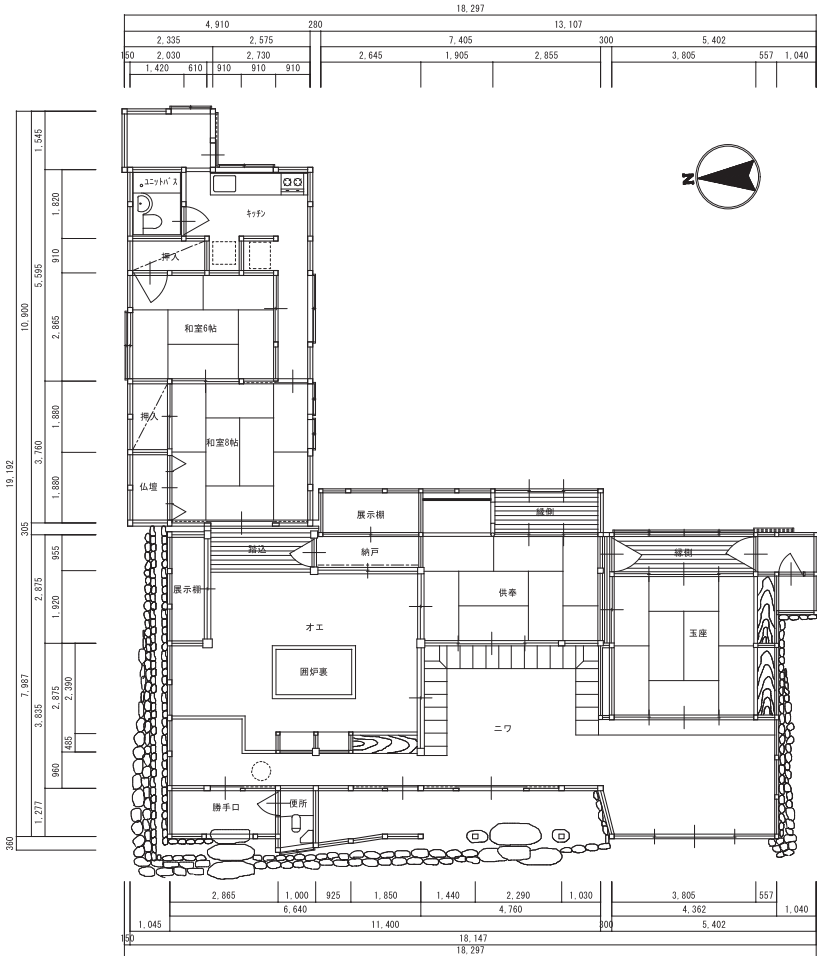
現存の住宅に関しては，明確な建築時期は明らかでないが，主屋部は江戸時代初～前期まで遡る可能性があり，その南につながる玉座部も江戸時代中ごろにはつくられていたと思われる。ちなみに「玉座」と呼ばれるのは，明治 11 年，天皇の北陸御巡幸の際の小休所になったことに起因すると思われる，それ以前はこの部屋と前方の土間を特に「御茶屋」と呼び，藩主や貴人の休憩所に宛てられていたと考えられる。そして「御茶屋」として，かつ藩主用の休憩所を兼ね備えていることが当家住宅の大きな特徴である。加えて主屋部に関しては，旧武生市を中心とする丹南地域に広く分布する越前Ⅰ型や今庄板取宿の民家よりも敦賀市域から小浜市東部にみられる若狭Ⅰ型の民家形式に類似していることも指摘できる。

以上のように、前川永運家住宅は、中世、近世における福井県の歴史・文化史的にも、また県内に残る近世民家のひとつとしてもきわめて貴重な価値を有し、今後も末永く守り伝えていくべき歴史文化遺産といえる。

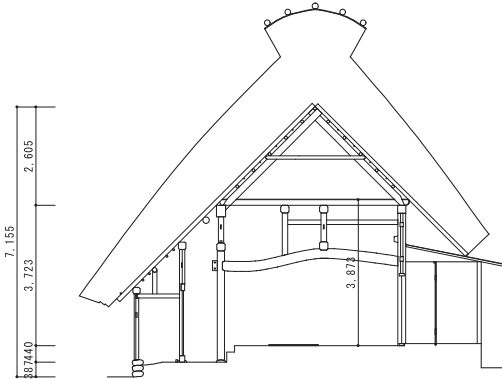
註

- (1) 『福井県今庄町誌』、ぎょうせい出版、1981.4
- (2) 前川家所蔵、前川家の由緒や藩主を迎える際の習わし、木の芽峠に関わる出来事、言うな地蔵の伝承などを書き留めたもの。文中に「府中今ノ武生」とあり、府中が武生と改称された明治2年以降に書かれたものであることがわかる。
- (3) 松平文庫蔵（『続片叢記一』）に掲載、なお扶持高は貞享3年の半知の大法以前は14石、3人扶持であった。
- (4) 註3同
- (5) 註1掲載
- (6) 『前川家ノ記録』に「御山廻リト申ハ阿蘇浦杉津浦横濱浦大飛田浦元飛田浦ノ各浦塩焼燃料柴刈山越前ヨリ貸シ出シ山トシ年々山札ヲ渡シ年貢取立ノ為メ山廻リ折々致ス役ナリ依之テ御御（ママ）山廻リト云六石二人扶持取リノ御足輕ナリ」、「木ノ目山ハ大方ノ部領分境トナリシ故口止御番所建設相成三人勤番結居（中略）前川家一軒ニテハ何カニ付不弁ナル可シニツ屋ニ居リシ御山廻リ吉羽某ヲ木ノ目山エ登シ其後モ御番所ト申スニ因リ門柱柵等現存シ年々二回ツツ修繕相成タリ」とある。
- (7) 福井県教育委員会、『福井県の民家—民家緊急調査報告書—』、1970.3
- (8) 『福井県南条郡今庄町板取地区伝統的建造物群に関する調査研究報告書』、1975.3
- (9) 杉原丈夫編、『新訂越前国名跡考』、1980

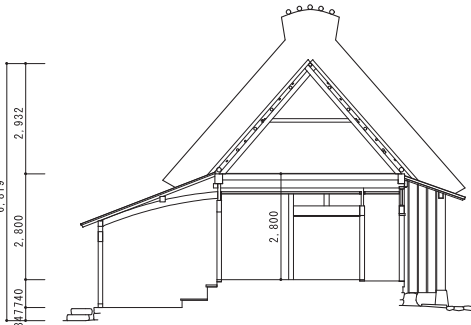
木の芽峠の御茶屋前川家住宅



前川家住宅 1 階平面図 1/200



前川家住宅主屋部断面図 1/200



前川家住宅玉座部断面図 1/200



前川家住宅概観（北側）



前川家住宅概観（南側）



主屋部（ニワ）



主屋部（ニワから供奉をみる）



主屋部（供奉①）



主屋部（供奉②）



主屋部（オエ①）



主屋部（オエ②）



主屋部（オエ③）



主屋部（オエの梁組）



玉座部（入口の土間①）



玉座部（入口の土間①）



玉座部（玉座①）



玉座部（玉座②）



小屋組（主屋部）



小屋組（玉座部）

（平成 29 年 3 月 31 日受理）